



新収作品：ダンテ・ガブリエル・ロセッティ《愛の杯》

New Acquisition: Dante Gabriel Rossetti, *The Loving Cup*

昭和59年度の新収作品および活動の概略について

On the New Acquisitions and the Main Activities of 1984

昭和59年度の新収作品および展覧会を中心に当年度中における国立西洋美術館の活動の概略を記すと以下のごとくである。

1. 新収作品

先ず特筆すべきは年度初頭に松方幸次郎氏御遺族7氏の発意により次の3点の絵画の寄贈が行われたことである。即ちオノレ・ドーミエ作《観劇》、エドゥアール・マネ作《ブラン氏の肖像》およびカミーユ・ピサロ作《収穫》であって、これらのうちピサロに関しては当館に保管される旧松方コレクション中にすでに3点が存在するが、ドーミエとマネはそこになく、従って今回の寄贈はこれら2人の画家に関するこれまでの欠落が補われた意味からも重要である。かつまたピサロと併せて3点ともに極めて秀れた作品であることは、当館の収蔵品に一段と充実度を加えた。その意義はまことに大きいと言わなければならない。

ドーミエの《観劇》は小品であるが、狭い階上の棧敷から左方遠くの舞台に見入る四人物をシルエットで捉えて前面に大きく配し、各人の表情はほとんど分らぬものの、左端から割り込むようにして覗き見る男の姿勢などによって、場内の興奮を鮮かに描き出したドーミエの手腕は、さすがに風俗画、諷刺画の巨匠であることを首肯せしめる傑作である。因みに当館には昭和54年度購入作品として同じ画家の《マグダラのマリア》がある。マネの《ブラン氏の肖像》は1879年、即ち画家47歳の円熟期の作品であり、死去の4年前に描かれた。その年宿痾の脚疾療養のためパリ近郊のベルヴェーに在ったマネは、そこで識り合ったアルマン・ブラン氏のこの肖像を描いたが、モデルについては詳しくは分らない。ただし緑濃い木立をバックに陽の当る明るい庭の小道に立つこの紳士は鯢背なポーズと言い、伊達な風体と言い、絵そのものが雄弁に彼の素性を物語っている。本図をみて小説『マダム・ボヴァリ』（1856）の世界を想起する人も少なくはあるまい。マネとフローベールとはまさに同時代人であった。当館は昭和62年度購入作品としてマネの《花の中の子供》（1876）を所有するが、その3年後にこのブラン氏の肖像は描かれた。またピサロの《収穫》は1882年画家52歳の作で、戸外でのスケッチとアトリエでのモデル習作を組合せたもの。早くから当館に保管される松方コレクション中の《エラニーの秋》はこれより13年後の作であるが、視

点を高くとり風景画としての性格を強めているものの配色等は極めて共通し、むしろ本図のための習作のごとき感じをすらあたえる。以上の3点はこれまで長らくブリュッセル美術館に保管され広く親しまれて来たものであるが、今般所有者の意志により永久保存を条件に当館へと寄贈されることとなったのである。

次に購入作品としては絵画2点、素描2点、版画4点(96枚)があり、これに当館第二代館長故山田智三郎氏御遺族の寄附になるロヴィス・コリントのエッチング《ヴァルヒェン湖畔の家》を加えて総計8点となる。各作品に関しては別項の新収作品解説に譲るが、絵画2点のうちダンテ・ガブリエル・ロセッティの《愛の杯》はかつて松方コレクションに在ったもので、その後国内の所蔵家を経て今般当館の収蔵品に加えられた。ラファエル前派の代表的画家であるロセッティ39歳のこの作品は、モデルを特定できること、あるいは主題やモチーフの文学性などとも関連して、いかにも文人画家ロセッティらしい持味を十分に伝える佳品であり、かつまた永らく所在不明とされて来たので、今般当館に収蔵されたことの意義は大きい。また素描2点はポール・ゴーガンの扇面水彩画《ラ・マルティニック島の情景》一対であって、1887年、西インド諸島に滞在中の画家39歳の年のグワッシュ素描であり、扇面という形式は平塗りの明るい色調とともに当時のゴーガンにも及んだジャポネズリーを明証する貴重な作例である。他方版画はゴヤの《ロス・カプリーチョス》およびビラネージの《牢獄》の各連作においてともに極めて珍しい初版を入手することができた。殊に後者はその後の再版において徹底した改訂が行われる以前のもので、この《牢獄》連作は普通再版での構図がよく知られまた入手もし易いので、当館としては何れ両版を対比して展示できるように配慮する所存である。またジュリオ・カンパニョーラの銅版画《洗礼者ヨハネ》は1505年ころと推定されるイタリアの古版画の名品であり、この画家がマンテーニャやデューラーから受け、またジョルジョーネやティツィアーノらへ及ぼしたさまざまな影響関係を考えるとき、単に版画という域を脱して近世初期欧州美術史の動きを如実に伝える好資料とも言える。銅版画技法史の上でも、スティブル(点刻)法を使用した最初期の代表例として極めて重要である。

2. 展覧会

松方コレクションを主体とする平常陳列の他に本年度当館で行われた特別展は春に「マウリッツハイス王立美術館展」、夏に「ドイツ美術展」、秋に「ウィーン美術史美術館展」があり、さらに8、9月に東京国立博物館を場として東京都などと共催の「ヨーロッパのタピスリー展」が加わった。このうち「ドイツ美術展」が年度予算による自主展である。

先ず「マウリッツハイス展」(東京新聞、中部日本放送と共催)はその名称のごとく、オランダのデン・ハーグ市所在の王立美術館マウリッツハイスの藏品から選ばれた42点の絵画によって構成されたが、それらはすべて〈黄金時代〉と呼ばれる17世紀オランダの作品であり、フランス・ハルス、レンブラント、ロイスダール、フェルメール等の巨匠の佳作を中核として組み立てられた。殊にフェルメールの《青いターバンの少女》やハルスの小品《笑う子供》は傑作であり、またカレル・ファブリティウスの《ごしきひわ》も美術史上極めて有名な作品である。さらにヘンドリック・テルブルヘンの《聖ペテロの解放》は当館にまさにこの画家に帰される同題の作品があり、比較対照の機を得たことは有意義であった。

次に「ドイツ美術展」はニュルンベルクのドイツ民族博物館からの164点に上る美術および工芸品からなり、それらがすべて神聖ローマ帝国皇帝カール四世の死去の年からその6代後のカール五世の退位まで、即ち1378—1556年の間に制作されたものであることから、展示会は〈中世から近世へ〉という副題を与えられた。展示は4部に分かれ、第1部「都市の姿」では笛を吹く少年の姿を表わした噴水像を中心に、祭壇画や驢馬に乗るキリスト像、聖クリストフォロスの立像や聖母子像等の彫刻、あるいは傭兵隊長の肖像画などを配して中世末期のドイツの都市の姿を再現し、第2部「転換の時代」ではデューラー、クラナッハ、ファイト・シュトース、リーメンシュナイダー、ペーター・デルなどいわゆる〈ドイツ・ルネサンス〉期の代表的芸術家の手になる絵画、彫刻、デザイン等をそれぞれ佳作によって展示し、殊にデューラーの設計した高脚杯やクラナッハの《ヴィーナスとキューピッド》等は人々の注目を集めた。またハンス・フライデンヴルフの《レーヴェンシュタイン伯の肖像》はデューラー、クラナッハらの肖像芸術の直接の先蹤をなした極めて重要な名品である。第3部「中世末期の人間像」では版画やメダイユによる当時の知名士の肖像、第4部「手工芸」では小箱、人形、ガラス器、陶器、あるいは甲冑、短剣、火縄銃なども展覧されて500年あまり以前の世界をまざまざと身近かに感じさせる工夫が凝らされた。なおこの「ドイツ美術展」と併せて開催されたシンポジウムについては別項で述べる。

「ウィーン美術史美術館展」(毎日新聞社と共催)はヨーロッパの王侯収集中でも最も古い歴史を誇るハプスブルク家のそれを母胎としたウィーンのアート史美術館からの絵画48点をもって構成された。それらは収集史を示すという観点を主眼として選択されたが、結果的にウィーン宮廷の好みをはっきりと浮彫りにすることとなったのは興味深い。即ちイタリア絵画では16世紀のヴェネツィア派が圧倒的に多くを占め、それに先立つ15世紀フィレンツェの初期ルネサンスの作品は皆無であるとか、あるいはバロック部門の充実ぶりがそれを示し、またベラスケスのマルガリータ王女の肖

像画は将来の皇后を約束されたこのスペインの幼い姫君の成長記録としてマドリード宮廷からウィーンへ年々に届けられた、いとも豪華なる贈物の一つであったというのもこの収集ならではの逸話である。

東京国立博物館を会場とした「ヨーロッパのタピスリー展」は、パリ市長ジャック・シラク氏の訪日を機に招来されたもので、王立ゴブラン工場の製品を中心に、15世紀から18世紀に及ぶフランス、ベルギー、イギリスのタピスリー27点が展示され、我が国に馴染みの少いこの芸術の展開史を表現と技法に亘って手際よく紹介する好企画であり、当館はカタログ作成や展示に協力を行なった。

以上の4展は何れも独自の主張を明確に示した企画であり、特に自主展である「ドイツ美術展」は当館における久々の中世美術展としてその充実した内容は出色のものであった。それは偏えにドイツ民族博物館と当館との万般に亘る緊密な協調の賜物であったことをここに付言しておきたい。

3. シンポジウム

前記「ドイツ美術展」を機に7月9,10,11日の3日間、当館講堂において美術史学会と東京ドイツ文化センター主催の日独美術史シンポジウム「工房か芸術家か」が行われ、これには日独双方から美術史家のみならず一般（または経済）史家の参加をも得て、中世末・近世初期における日本とドイツの社会状況を明かにする等、極めて有意義であった。プログラムは次の通りである。

第1日

「中世後期ドイツ市民文化の勃興」

ミュンヘン大学教授 カール・ボーズル（通訳：魚住昌良）

「日本中世の民衆の自由について」

神奈川大学教授 網野善彦（通訳：上田浩二）

第2日

「雪舟とデューラー」

国立西洋美術館長 前川誠郎（通訳：発表者）

「中世末期のドイツ工芸」

ドイツ民族博物館員 レオニー・フォン・ヴィルケンス（通訳：田辺幹之助）

「日本の中世社会における芸術家」

ケルン市立東アジア美術館長 ローガー・ゲッパ（通訳：有川治男）

「仏師と面打ち」

国立歴史民俗博物館員 田辺三郎助（通訳：永井繁樹）

第3日

「十五世紀末および十六世紀の日本絵画」

東京大学教授 辻惟雄（通訳：大原まゆみ）

「ゴシック工房における作業分担」

ドイツ民族博物館員 トーマス・ブラヒェルト（ウルリヒ・シュナイダー代読、
通訳：岡野圭一）

なお最終日の午後には総括討論が行われ、前川誠郎の他、ドイツ民族博物館長ゲルハルト・ボット、東京大学教授成瀬治の共同司会（同時通訳：高階^{たかほし}昌子）によって行われた。本企画は恰も開設25周年を迎えた東京ドイツ文化センター（館長クラウス・P・ロース）の館を挙げての援助に依るところが多く、ここに衷心より謝意を表したい。

4. おわりに

本年は当館も創立25周年を迎えた。年間に特別展4、シンポジウム1はかなり厳しいプログラムであったが、自主展はもとより共催展にしても企画の当初より主導権をもってこれに参加するという積極的な姿勢が年を遂って強まって来たかに見受けられるのは喜びに耐えない。展覧会はその年度において初めて企画されるものではなくて、事前に多年の準備を必要とするとは言うまでもない。今年度中に新しく構想に着手した展覧会も幾つかあり、そのためすでに館員が海外へ調査へ赴くこともあった。そのような機会に購入候補作品の調査を併せて行うこともしばしばである。また外来の訪問者も増加の一路を辿り、これらの人々との応接が当館の諸企画に好影響をあたえる事例も多い。その意味では西洋美術館は単に一つの美術館であるに留らず、我が国が世界へ向けて開いた窓口の一つであるとの認識と自覚を深める次第である。

館長 前川誠郎